



一貫コース通信

かつてイタリアを旅行中に、シチリア島のコルレオーネという田舎町を訪れたことがある。映画『ゴッド=ファーザー』の主人公がこの村の名前「コルレオーネ」を名乗っており、またイタリアマフィアを輩出した町として知られていたことから、興味本位で行くことを決めたわけである。シチリア島の中心都市パレルモからバスで2時間ほどだったろうか。山道を走り、昼過ぎに小さな停留所に降り立った。停留所の前には古びた教会、断崖の上には十字架に架けられたキリスト像が見え、この町に住む人々の信仰の深さを感じ取った。さながらP. マスカーニのオペラ『カヴァレリア=ルスティカーナ（田舎騎士道）』の雰囲気を感じさせるものであった。このオペラの舞台は実はコルレオーネではないのかと思ったほどである。

コルレオーネで驚いたことが2つあった。1つ目はシエスタの習慣が残っていたことである。シエスタとは、アラブ人（イスラーム教徒）の風習のひとつで、午前中の仕事を終えると、午後の12時頃から16時頃までいったん帰宅し、昼食や休憩をとるというものである。仕事は16時頃から再開され21時頃まで続けられる。かつてヨーロッパ南部はイスラームに支配されたり、また文化的交流があったりしたことからシエスタの習慣が入り込んでいたのだが、都市部ではもはやなくなってしまっていた。この時間、町は静まり返り、道を歩く大人は全くと言ってよいほどいなかった。子どもが2、3人、サッカーに興じていたくらいである。家々からは昼食を作っているのであろう美味しそうな香りが狭い道に漂っていた。

2つ目は、ふと立ち寄ったバール（イタリアのコーヒーショップ）でマスターと話した時のことである。「日本人か」と問われた後、「日本の本に載ったことがある」というのである。シチリア島の、日本人はおそらく一人もいないであろう田舎町のバールのマスターがなぜ日本の本に…とっていると、マスターが一冊の本を持ってきて見せてくれた。日本語で書かれたページをめくっていくと、コルレオーネを特集したページにマスターの顔写真が載っていた。国際化の進展を感じたとともに、コルレオーネと日本とのつながりを実感した瞬間でもあった。世界のどんな小さな田舎町でも、このように日本とのつながりはあるのかもしれない。コルレオーネでの滞在は、残された古い文化と世界とのつながりを同時に体感できた経験となり、私の中に蓄積された。



異文化との接触は、驚きとともに、自身の精神世界を大きく拡大させてくれる。

今年度から中学校・一貫コースでは研修旅行が海外に戻り、11月には高校1・2年生、2月には中学3年生がカナダのビクトリアでホームステイや学校交流などを行う。海外に行くということは、異文化と接する機会であり、精神的な認識の拡大を期待できるチャンス

でもある。新たな価値観が次から次へと入り込んでくるため、生徒たちの興奮は止まらないだろう。ただし、これを得るためには、自らが主体的に行動することが必要である。私自身の経験から考えることであるが、様々なことを受け入れようとする好奇心と寛容な心、そしてそれに伴った行動こそが、自身の認識の拡大につながっていくのである。

ホストファミリーとどのようなことを語らうのか、同世代の高校生たちと何を伝えあうのか、生徒たちには様々なことを想定して参加してほしい。もちろん想定通りにいくはずもない。だからと言って想定しておかなければ得るものは少ない。生徒たちが何を得てカナダから戻るのか、一教員として楽しみにしたい。